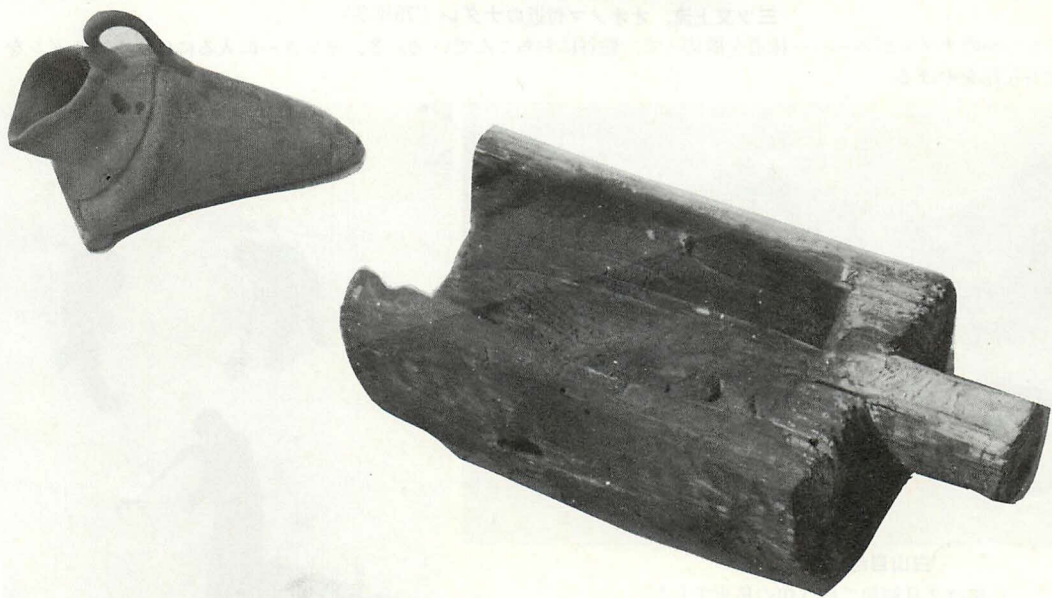


# はくさん

第3巻 第4号



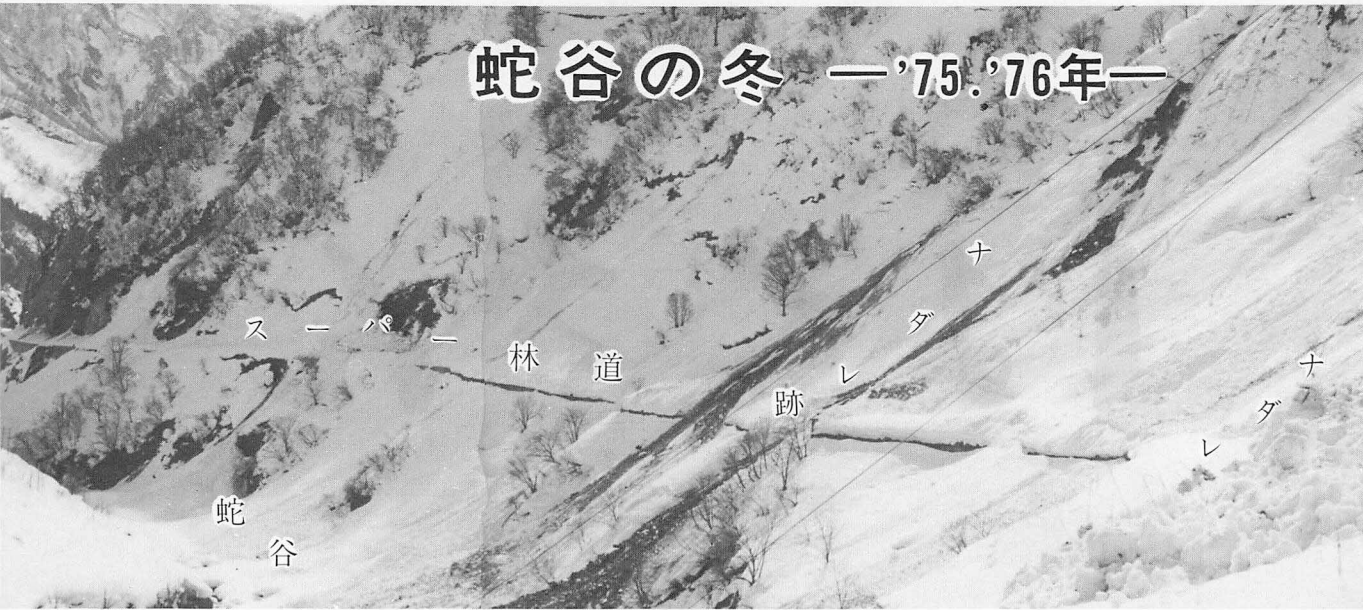
## チョウシとジュノウ

まだ家々にイロリがあったころ、それにともなっているいろいろな生活具が使われていました。その1つの例が、写真のチョウシとジュノウです。チョウシは陶製で、これは村でつくっていたものではなく、どうも村の外から購入したもののようです。これは、イロリの灰の中へとがった方からさしこみ、お酒の燗をつけるのに用いていたものといえます。

もうひとつ、ジュノウは最近では見かけることがほとんどありませんが、私達の家庭でも炭を使っていたころには、金属製のものがありました。だから、ジュノウという名前とその用途は、ほとんどの方が御存知だろうと思います。ただ、写真のものは、ナラの木製といわれ、もちろん手製です。木製のうつわで火を運んだわけですから、当然ジュノウは少しずつ焼けこげて、うつわが薄くなってしまう。それで、最初は大変肉の厚いものとしてつくられていたようです。大変に簡単な道具ですが、このようなちょっとした工夫に、生活の知恵をみる思いがします。

〈松山利夫〉

# 蛇谷の冬 —'75.'76年—



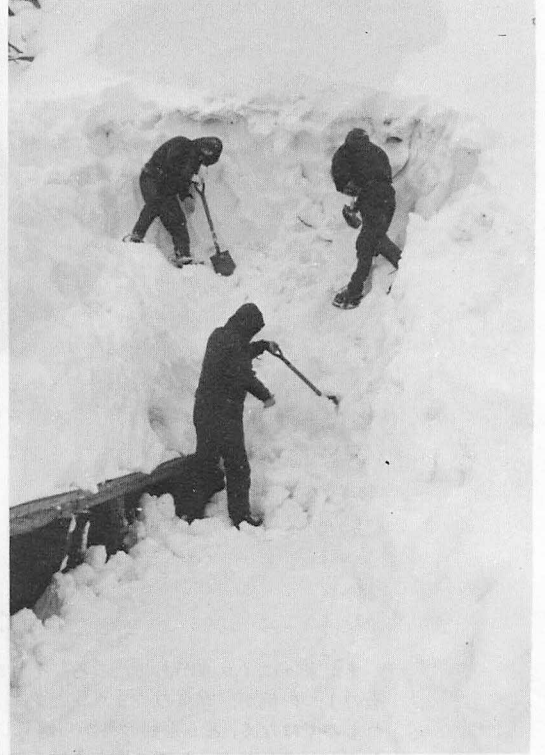
三ツ又上流，オオノマ付近のナダレ（'75年冬）

いくつかのナダレがスーパー林道を横切って，蛇谷におちこんでいる。冬，センターに入るには，このナダレをさけて，蛇谷左岸をのぼる。



白山自然保護センター

今年は2月初旬で約3mの積雪でした。



ジライ谷休憩舎の除雪（'76年）



センター施設を管理するため，蛇谷左岸をラッセルしながらのぼる職員（'76年）。

昨年，今年と毎冬，センター諸施設の維持管理のために，自然保護課を中心とする職員によって除雪作業がおこなわれました。そのときの写真から蛇谷の冬をみてみましょう。

# ライチョウ移殖をめぐる生態学的諸問題

## 2 白山は極北の小島

花井正光

### 問題の提起

前号で私は、白山にライチョウが分布していたのかという問題について、絶滅の時点はさておいて、かつて生息していたライチョウがその後何らかの原因で白山から姿を消したとの見方を、一応、述べておきました。それに、白山がライチョウの現在の分布地である中部山岳からは隔離されたところに位置することを図で示し、このことが絶滅原因をさぐる糸口になるのではとも述べました。

そこで今回からは、白山の地理的ないしは気候的条件を中心に、ライチョウの生活場所との関連性のもとに、絶滅の原因として考えられそうな諸現象について触れてゆきたいと思います。

そのまえに、ここで問題にしようとする白山は、ハイマツやお花畑の広がる山頂部、即ち高山帯に限った部分だけを原則としてさすことをおことわりしておきます。ライチョウの生息場所がこの地域にはほぼ限定されているので、こうしておいてもそれ程問題にはならないでしょう。

### 白山は小さな島

白山が島だなどといえば、たとえそれが海に浮かんだ島でなくとも、まさかと一笑に付されてしまうのかも知れません。しかし、ちょっと考えてみて下さい。山頂部は、当然のこととしてそれよりも下部を台にして乗っかっている訳ですから、地表を覆う植生だけをとっても、平面的に真上から観れば、中央部に当る部分は、それよりも外の部分に周囲をぐるりと取り囲まれたものになります。模式的に示した図の1をごらんください。おわかりいただけますでしょうか。中央部(高山帯)に生活場所をもつライチョウは周辺部(亜高山帯や山地帯)を利用することはできないのですから、彼等の生活場所は、いわば海に囲まれた島(小さな陸地)みたいな空間だと考えられなくもありません。

さて、山の高さだけで高山帯を区別できるほど簡単ではないのですが、中部山岳地に限れば、およそ2500m位からハイマツの群落が現われるので、一応この海拔以上が高山帯と考えられます。しかし、白山ではもう少し低



北アルプス・白木峰からみる白山 (写真: 林 正一)



白山からの北アルプス遠望 (手前は三方崩)

いところからハイマツ群落は出現するので、2300 m位を境として考えてよいでしょう。ところが、海拔2700 mどまりであることや、全体に山塊が小さいことなどから、白山の高山帯はせいぜい2000ha位にしかありません。ライチョウの分布している各山岳との詳しい比較が必要ですが、独立峰である白山と連峰としてのアルプスとでは、高山帯の規模もおおずと違っている訳です。写真の1と2でその感じをつかんでいただけるかと思います。従って、白山の高山帯は、どちらかという、面積的には小規模だと言えそうです。

それともうひとつ、つぎの事実もたいせつに思えます。それは前号の図3に示したとおり、ライチョウの分布する山岳地が日本の屋根とも称されるアルプスに集中して広がっているのに対して、それらの地域から隔たって位置している白山は、ハチ岳や蓼科山と同じく独立峰であることです。つまり、これらの三山はライチョウの分布中心地からは隔離された高山であって、この意味でも、これらの山々が島に相当するといえそうです。私が、前号の図3で、破線で囲んだこれらの三山に注目しておいてくださいといったのも、実は、このことを指摘したかったからに他なりません。

以上を要約してみると、主として地理的にみた場合、ライチョウにとっての白山は、どうも面積の小さい、しかも島状の山であるといえるようです。ところで、前号でも触れましたが、白山が島であるとして、そのことがライチョウの絶滅とどう関連しているかということについての謎解き推理ですが、それに入る前にもっと他にも考え合わせてみなければならないことがあるので、まずそのことに先に触れておきます。少なくとも、関連ありと思われる現象は、一応、考えに入れてみるのが、より正確な推理を導くことになるのですから、謎解きとは、ほんとに骨の折れる仕事だと思えます。

### 高山帯と極北のツンドラ

白山という名の由来は、文字どおり雪にちなんだものなのでしょう。初夏に、なお融けさらずに残る雪をみるまでもなく、高山が低温であるのは相場というものです。これまで、高山帯という語を幾度となく使用してきましたが、ここでちょっとその状態について気候的条件を中心に述べておかねばなりません。前号でやはり、私はライチョウの世界的分布を図にしておきましたが、その際、北極を取りまくようにして分布域が広がっていることに触れておきました。そこで、ライチョウの分布するこれらの地域と中部山岳地の高山帯が気候的によく似ていることを、ここでは述べてみたいと思います。

さて、高山帯という言葉の規定ですが、一般的には、「山岳において、寒帯的気候をもった場所」といえます。ここでいう寒帯的気候とは、年平均気温が0℃以下である状態をさしています。このような寒冷な条件下では、



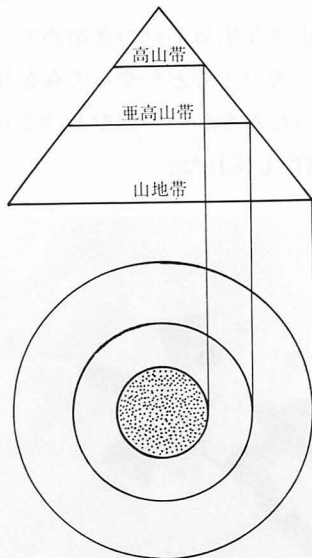
ハイマツを中心とした低木林が広がる高山帯はツンドラの景観である。御前峰の東斜面。

高木が森林を形成することができず、低木や草原が広がるようになりますが、このような地域はツンドラとよばれ、高緯度地方に带状に広がっているのです。図2をごらんください。その分布状態がよくわかっていただけるはずですが、以上のような訳ですから、高山帯は気候学にも生態学的にも極北地方のツンドラと似た条件下のもとにあるといえそうです。従って、白山はツンドラに相当する空間であると考えることができます。もちろん、中部山岳地の高山帯全体に対しても、このことはいえます。

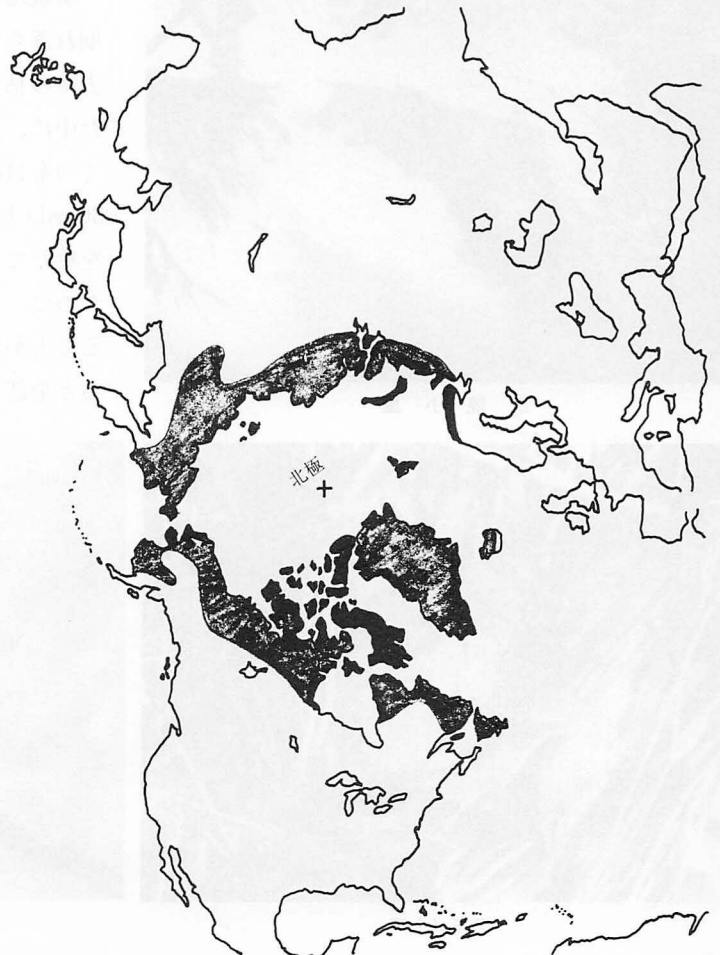
ところで、気候条件からみた高山帯の位置づけになぜ注目しなければならないかといいますと、実は、その説明自体が当面の謎解きになるのですが、寒帯すなわち極北地方における動物個体群の生活様式には、個体数の年

次変動の周期性についてかなり一般的な法則があるからです。動物個体群とか個体数の年次変動さらには周期性といったことばは、読者の皆様には、あるいは耳慣れないことかもしれませんので、次回以降でその都度簡単に紹介することにしたと思います。

ともかくも、これで謎解きの足がかりが出そろった感じです。もう一度ここでまとめておきますと、白山は、気候的には極北の寒帯に相当しつつ、地理的には一種の島の様相を呈した空間であると考えられることです。さて、次回からはいよいよ、これらの特徴がライチョウの生息場所として、どのような関連をもっているのかについて、生態学的にアプローチを試みたいと思います。このことは、白山からライチョウが姿を消した経過の推察に他ならないのです。〔研究普及課〕



高山帯が島状に隔離されていることを示す模式図



# 植物の四季 1

## 春をまつ

四手井 英 一

白山の春の訪れは早い。数mも積もっていた雪もいつのまにか少なくなって、吹き渡ってくる風の中にも、遠くの山々の薄青い影の中にも、何となく「春」を感じるようになった。

冬の間、灰色にくすんでいた雑木林の木々も、うっすらと色づいて見え、つい数日前ま

では重い雪の下にすっかり姿をかくしていたタニウツギ、ヒメアオキ、ヤマブキなども、もうシャンと体を起こして、その枝先に、ふっくらとふくらみかけた芽をつけている。

鶴来の裏山で炭を焼いている人がある。炭を作るのには、芽をふく前の水分の少ない木が良いそうで、きょうも炭焼小屋から煙が上がっている。

炭焼用の雑木を切り出した跡の斜面の雪が崩れ落ちて黒々とした地面がのぞいている。去年の枯草や落葉がギュッとおしかためられた中に、薄緑色の小指程の大きさのものがいくつも目についた。「フキノトウ」だ!! まだ30cm以上も雪があるのに、その下ではもう春を感じてこんな小さな生命が息づき始めていたのだ。重く冷い雪の下でどうやって春を知ることができるのだろうか……雪をどけてみると全部で20個程も採れた。



炭 焼 小 屋



フキノトウ



マルバマンサクの花

炭焼小屋の近くに黄色の花をつけた小枝が積み重ねてあった。地元では「ネソ」と呼んで、ねじっても折れにくいこの枝を、炭俵を編んだり、木を束ねたりするのに使っている「マルバマンサク」だ。まだ他の植物が深い雪の下で眠っているころ、一番先に、黄色のテープで作った紙細工のような小さな花を開くので、この花を見ると、春なんだなあ、と思うのである。

帰り道で、雪どけ跡のあぜ道に「オオイヌノフグリ」の紫色の花を一輪だけ見つけた。



コブシの花芽

のために、冷い水の中でセリをつんでいたおばあさんが語ってくれた。「口過ぎするにゃ山が一番だぞな、セリヤワラビ、ゼンマイ、何でもただやさかいに、銭はいらんし」。

暖かい、かげろうの立つあぜに腰を下して、老婆のふしくれたった手がノロノロとセリをつむのを見ながら、今夜は、セリのおしたしと、フキノトウを油でいためてミソでねったのを作って、身重の妻に春の訪れを知らせてやるう、と思っている内に、いつの間にかぐっすりと眠り込んでしまった。

〔研究普及課〕



オオイヌノフグリの花

ゲンショウコに似た小さな可愛い花であるが、実の形がそれに似ているというだけで「イヌノフグリ」などと言う少々いやらしい名前をつけられている。外国では「小鳥の目」と呼んでいる所もあるそうなのに……

たんぼの近くに「コブシ」の木があった。すでに、銀色の毛皮をつけた芽は大きくふくらんでいて、あの大きな白い花が咲くのが間近いことを知らせている。「この花が沢山咲く時にゃ豊年だし、花が咲いたら、じきにゼンマイを採りに行かにゃ」と、大阪から来る孫



冷い水の中でセリをつむ人

## 鞍ヶ岳のかくれ里

石野春夫



(イラスト 石川 太郎)

鞍ヶ岳の頂上の真下、切り立ったような数十メートルの絶壁を囲むようにして大きな池があります。この池は満々と水をたたえており、倉ヶ岳町の十数戸の村人達は、この池の水を農業用水として利用しております。

この池は長享2年(1488)、一向一揆に滅ぼされた加賀の地頭、富樫政親が坂巻新介と馬上に組んで頂上から馬もろともに転落して沈んだといわれている池で、7月のお盆になると水底に馬の鞍が見えるといわれています。とにかく満々と水をたたえ、囲りの山の緑を青々とした水面に写して溜れることを知らず、昔から水底には主が棲んでいるといわれ

ています。そのため誰1人として一番深い水底を見た者がいないという山頂の大池です。

藩政の頃のある夏の天気の良い日のことです。川漁師で水にくぐることは加賀一番といわれた加賀藩おかかえの男が、誰も入ったことのないといわれるこの鞍ヶ岳の大池の水底を調べようと数人の友人を伴ってこの池へやって来ました。

男は池のふちで着物をぬぎ、ふんどし一つになって腰に長い綱を巻きつけ、一方の端を友人に持たせ、岸で待たせて1人で池の中へ入って行きました。池の中央へ泳いで来た男は、一番深い所を目ざして頭から逆さまに深く深くもぐって行きました。

池の中心部は意外と深く、男は綱をひきながらもぐって行きました。するとだんだん回りがせまくなり、横向きの穴となって続いているのでそのまま横穴へと入って行きました。横穴を進むうちに呼吸が続かなくなり引き返そうとしたとき、男の体は穴の中の水面に出ました。しかも浅瀬にたどりついて水のない砂地へはい上ることができました。

水底をくぐりぬけたところが真黒闇の洞穴であったのにおどろいた男は、回りを見廻すと遠くの方にポーッと光が見えました。その光を目ざして一歩、一歩、用心しながら進んで行きました。

洞穴の出口の所まで来た男はまたまたびっくりしてしまいました。洞穴を出た少し向い側の所に人間の腰位の高さの生垣があって、そのむこうに立派な建物があるのです。恐る恐る生垣に近づいて小さくぐり戸から中をのぞいてみますと、生垣と建物の間は小さな



庭になっていました。家の雨戸は空けてあり、中は立派な座敷になっていて、部屋の真中にはいままで人が居たらしく香炉からは、ゆらゆらと香の煙が一すじ立ちのぼっているのです。

男は恐ろしくなって、こっそり引き返そうとした時です。「何者じゃ」と、家の中から声がお公家さんのような姿をした上品な中年の人が縁側へ出て来ました。男は恐ろしくて、へなへなとその場へ座り込んでしまいました。「どうしてここへ来たのじゃ」と問われましたので、鞍ヶ岳の水底を探ろうとしてたどりついたことを正直に話しました。すると、「ここは、お前達の来る所ではない。今日のところは許すが、再び来てはならぬ。帰ってもこここのことは他人に話してはならぬ。もし他言することがあれば、即刻そなたの命がなくなるものと知るがよい。夢々他言するでないぞ。帰り給え……」と、言い終えるとそのまま奥へと入って姿が見えなくなってしまいました。

男はやっと落ち着きを取りもどし、もとの洞穴へと逃げ帰り、再び水の中へともぐって帰りを急ぎました。

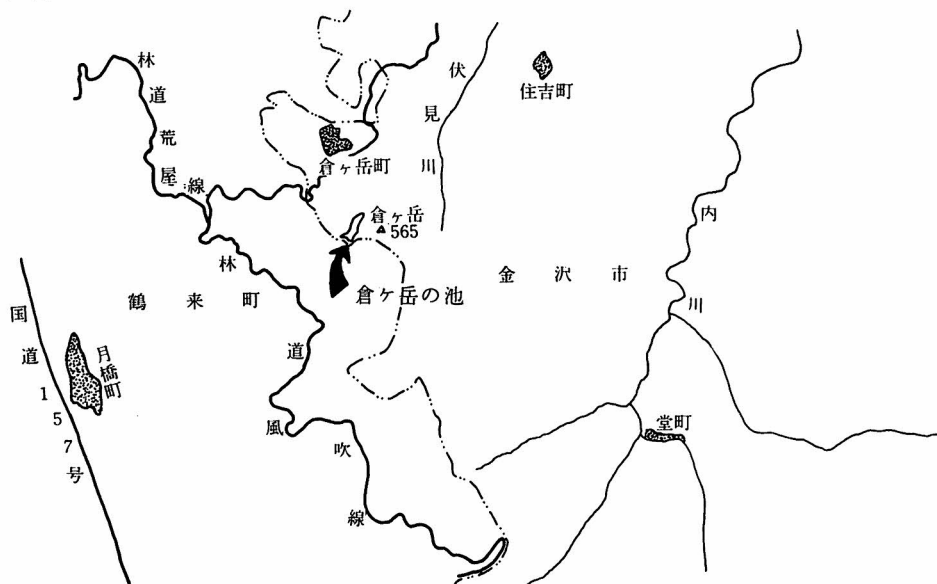
一方、池の岸では友人達が心配しながら

待っていました。綱は延びていったきり止ってしまい、小半刻近くにもなるのに何の合図もありません。そんなに長く息が続く筈もないのに顔を出さないのは、水底の主に食われたか、綱が何かにからまって動けなくなって死んでしまったにちがいないとみんな考えました。綱をたぐり寄せようとしても何かに引っかかったようにピンと張ってしまってどうしようもありません。水底へ綱をつたわって入ることも恐れて誰も水の中へ入ろうとしません。みんな気をもんでいるところへポツカリと例の男が浮かび上って来ました。

岸で首を長くして待っていた友人達はどっと喜びの声をあげて彼を迎えましたが、男は岸へ泳ぎつくと青い顔をしたまま一言も口をきかず、そのまま着物を着るとだまって歩き出しました。友人達があわてて後を追いつつ互に声をかけますが、啞のようにだまり込んだまま家へ帰ってしまいました。

それから幾十年かが過ぎて、この男もとしいき病床につくようになりました。死期の近づいた男は家族達に若かった頃鞍ヶ岳の水底で見たこの話を語り終えると、そのまま眠るように息を引取ったということです。

(話 宮本亮之介) [鶴来町]



# ◆◆◆◆◆山日記◆◆◆◆◆

千村勝哉

このところ白山の3月初めとは思えない程の春日和が続き、もう冬もおしまいかという感じである。

1月の降雪は相当なもので、お陰で大抵のスキー場は大盛況のようであったが、2月に入ってから降雪ががた落ち、予想外に早いシーズン終了がスキーヤーをがっかりさせた。早めに終わった人の訪れないスキー場には独得の寂しさが残る。

この冬、白峰スキー場付近にはカモシカが一つがい、よく出没していた。1月のあの猛吹雪の中でたった2頭がうずくまっている姿を見ると、部屋の暖房が切れると不平をこぼす人間様に較べ、野生動物の強靱さづくづく思わされ、またいじらしくも思え声援を送りたくなる。そのカモシカも厳冬から解放され、スキーヤーもいなくなった今、残雪の上と藪の中を餌を求め、走り廻っている。走り方がやや鈍重に見えるだけに、その気軽な心地良さが手にとるようにわかる。

最近、猟をする人の話によると、リスやウサギ、キジ等が減っており、逆に天敵に当たるテン、キツネ、野良犬などが増えているという。これは単に天敵とそうでない動物の間における個体数量のバランス調節的な自然作用なのか、或いは登山者など人間が残す残飯を食べる（食べる事ができる）動物とそうでない動物との強弱関係なのかよくわからないが、年々山に出入りする人の数が多くなる傾向のもとでは気になる事である。

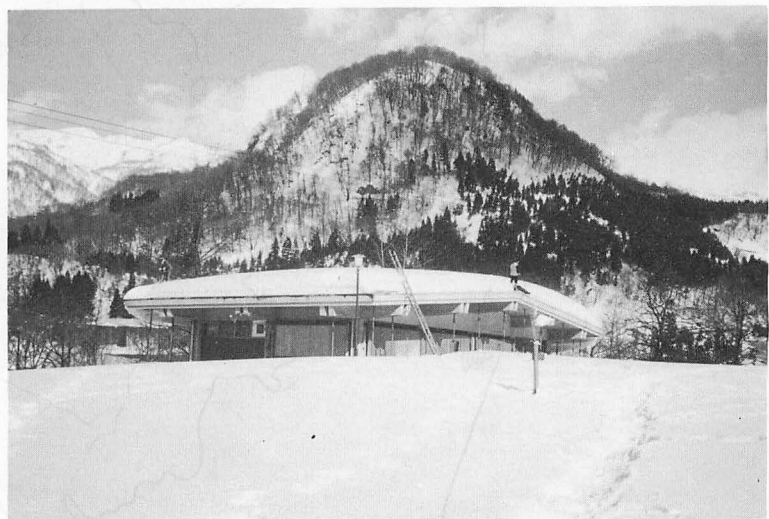
動物は冬から解放されると快適さにひたるだけだが、多雪地に住む人に待っているのは大変な雪害跡始末である。市の瀬でも今冬は旅館や公園管理事務所などの屋根庇など一部が雪圧により壊れているようだ。毎年冬の後には各方面で雪害が多度に及ぶが、住民にとってこの種の苦労は並大抵ではない。しかし山はどうか。今年は2、3月の降雪があまりなかった事から雪融けに伴う土砂流出も少ないのではないかと勘ぐりたい。溪流の水量も少な目の様だ。

今冬の白山冬山登山者による鶴来警察署への登山届出は4パーティ、49人との事であるが、北アルプスのような昨今の冬山銀座へ登ると違って、登山された方は本当の白銀の世界を堪能できた事だろう。遭難騒ぎがなかった

のは何よりも幸いなことで、とっつきにくい冬山白山への登山者はえり抜きの心得者と言うべきであろう。

さて、今年も山の幕明けを控え、草木も息吹き初音にそわそわし始めている。下界のざわめきも日を追って駆け登って来るようだ。今年の白山はどんなものか。せめて遭難犠牲者だけは出て欲しくないと祈るばかりである。

〈白山国立公園管理事務所〉



冬の市ノ瀬登山口

## 自然公園指導員紹介

——山田英樹さん——



2月だというのになく暖かな日の午後、白峰村役場に山田さんをおたずねしました。氏は地元にあつて、長い間自然の保護と利用のあり方について、いろいろと考えてこられたようです。現在は、住民課長という要職にあつて、日々村の人達との接触も多く、それだけに役場吏員としても地元住民としても、いろいろな御意見をおもちでした。

最近になつてやかましくいわれだした自然保護については、レジャーブームにのつた無責任な発言の多いことを嘆いておられます。よく、白山は「自然が比較的良好に残されている」といわれています。しかし、これは長い間にわたる地元住民の自然に対する配慮があつたからこそなので、こうした歴史的な背景を無視し、現象面だけをとりえた発言には、自然公園指導員としてもなつてくべきかねるものが多いといわれます。私達の白山、私の自然という認識にたつて、自然保護を考え、おしすすめていかなければ、とお考えのようです。

他方、利用面について、山田さんはこうもいっておられました。「自然公園というからには、一人でも多くの利用があつてこそ、だといわれます。そうして、この立場から指導員のお仕事を、「多くの人々に利用してもらつてなお、自然を保護していくのが私達の使命でしょう」と定義されてきました。そのもっとも基本的で大切なことが、「お山をきれいに」ということとうけたまわりました。

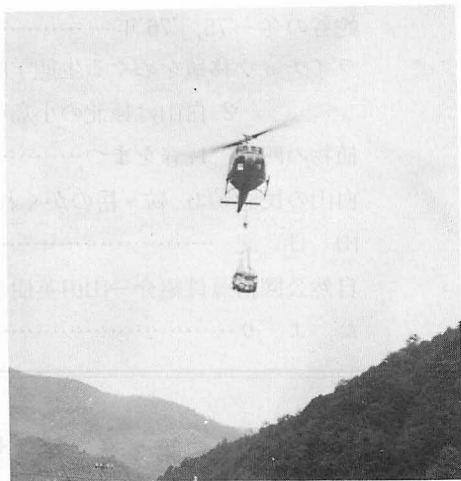
そこで、氏はみずから各地の山岳公園をお歩きになり、清掃の実態や自然保護のための現場でのあり方を視察されてきました。最近では、昨年に中部山岳国立公園をみてこられ、登山基地にゴミ収積所を設けるやり方など、白山でも検討すべきだとの感想をいだかれたとのことです。

また、登山道に関しても、白山は孤立峰であるがゆえに、利用者の側からすると他の山岳公園にくらべて変化に乏しく、現状のものぐらひはむしろ必要だという御意見をおもちでした。

しかし、こうしていろいろと活動をなさつてゐる山田さんは、それだけに悩みも多く、その1つに駐車場の整理があります。登山者がピークをむかえるころには、それに手をとられることも多いとおっしゃつておられました。



空きカンの山（別当出合）



山頂部のゴミの空輸

## たより

ことしは雪どけがいつもより早いようで、二月の始めには春がやってきてしまいました。遠くに見える白山の白いはだにも黒いしみができ、里山では、いつの間にかマルバマンサクやオオイヌノフグリの花が咲き、天気の良い日には、フキノトウやセリ、アサツキをつむ人の姿が見られるようになりました。

雪どけが早かったことと、南竜ヶ馬場や、尾口村の一里野に宿舎が新設されたことで、昨年にも増してにぎやかな白山になりそうです。

センターでは、毎年自然観察会や講演会を行ってきましたが、「白山を語る会」の第2回を3月6日、県自然保護協会の久保信一さん（失われゆく白山の自然の著者）を迎えて、金沢市の県社会教育センターで開催しました。

快晴の土曜日にもかかわらず、30数名の方々の参加を得て、昨年より問題になっている白山の雷鳥の移殖についての話題を中心に、白山の自然保護について熱心な議論がなされました。

今後も、白山の自然保護について、このような話し合いの場を数多く持ちたいと考えていますので、何か話題がありましたらお知らせ下さい。また、夏には、ゆっくり自然を観察するための白山登山を計画しています。動物や植物がどのように暮しているか、山の地形と植物にはどのような関係があるのかなど身近に見ていただこうと思っています。

昨年より半年間南米へ熱帯のサルの調査に行っていたセンター技師の水野昭憲が、3月末に熱帯の自然や人の暮らしについてのおもしろい話をお土産に帰ってきました。次号から彼の見聞録を書いてもらう予定です。

## 目次

蛇谷の冬—'75, '76年—	2
ライチョウ移殖をめぐる生態学的諸問題	
2. 白山は極北の小島	花井 正光… 3
植物の四季 1. 春をまつ	四手井英一… 6
白山の民話 (3) 鞍ヶ岳のかくれ里	石野 春夫… 8
山日記	千村 勝哉… 10
自然公園指導員紹介—山田英樹さん—	11
たより	12